

5) 妊娠中毒症と HLA 抗原系—PCR—RFLP 法を用いた遺伝子解析

高桑 好一・今井 勤 (新潟大学)
 荒川 正人・田中 憲一 (産婦人科)
 本多 啓輔 (小千谷総合病院)
 産婦人科
 幡谷 功 (長岡中央総合病院)
 産婦人科

妊娠中毒症の原因はまだまだ不明であるが、免疫学的・遺伝学的原因の関与が推察されている。一方、免疫学的・遺伝学的背景を有する疾患ではヒト主要組織適合抗原系である HLA 抗原系と疾患との関連性が検討されている。われわれはすでに妊娠中毒症と HLA クラス I (HLA-A, -B, -C) 抗原との関連性を検討し、報告している。今回、血清学的に判定が困難なクラス II 抗原につき PCR-RFLP (Polymerase chain reaction-restricted fragment length polymorphism) 法を用い、遺伝子型を判定し、疾患感受性、疾患抵抗性について検討した。重症妊娠中毒症症例43例、対照群50例について末梢血リンパ球から DNA を分離、PCR 法により多型性を有する領域を増幅し、制限酵素を用いて切断、その切断パターンにより、HLA 遺伝子型を判別した。その結果 HLA-DPB1 遺伝子型について、妊娠中毒症について疾患感受性を示す型が認められた。

6) 当院における過去10年間の産科統計

花岡 仁一・関根 正幸 (新潟市民病院)
 青野 一則・東條 義弥 (産婦人科)
 竹内 裕・徳永 昭輝

新潟市民病院では1987年に新生児医療センターが開設されて以来満10年が経過した。そこで、この間の主な産科統計について、全国的な動向をふまえながら報告する。

全国的な出生率の低下、妊婦の高齢化、多胎の増加、早産の増加は、当科の統計でもこれらの点が反映されており、近年では、分娩数約850件(減少)、高年初産3.5%(増加)、多胎3.8%(増加)、早産17.4%(増加)であった。

母体搬送は年々増加し、近年では分娩数の17.7%を占めた。

これらハイリスク妊娠の増加により帝切率は増加しており、近年では28.6%であった。

7) 染色体異常を伴った胎児水腫の一例

石田 道雄・上田 宏之 (上越総合病院)
 産婦人科
 関口 次郎 (新潟大学)
 産婦人科
 関塚 直人・荒川 正人 (産科婦人科学教室)
 田中 憲一

胎児水腫を契機に、夫の14・21番ロバートソン型転座が発見された夫婦の診療を経験した。この夫婦に流産歴はない。しかし、初回妊娠は、18週で胎児水腫が発見され、結局人工流産に終わった。児は女性で、剖検せず染色体検査のみ提出した。その結果、14・21番ロバートソン型転座および3本のX染色体という2種類の異常を合わせ持つことが判明した。間もなく2回目の妊娠が成立し、夫婦は胎児および自らの染色体検査を希望するに至った。その結果、妻は正常核型、夫と胎児は14・21番ロバートソン型転座(均衡型)を有することが判明した。妊娠は継続され、41週で3468グラムの健康女児が出生した。

ここに診療は一担終了したが、数々の疑問が残った。主なものは、初回の染色体異常と胎児水腫との関連の有無、および、過剰なX染色体の由来という2点である。立証はもはや困難であろうが、トリプルXと胎児水腫が関連し得る可能性は指摘できると考える。

8) 切迫早産症例に対する羊水穿刺に関する考察

夏目 学浩・今井 勤
 渋谷 伸一・松下 宏
 本多 晃・荒川 正人
 山本 泰明・関塚 直人
 長谷川 功・高桑 好一 (新潟大学)
 産婦人科
 田中 憲一
 須藤 正二・許 重治 (同 小児科)
 内山 聖

子宮内感染の正確な評価は切迫早産、前期破水の管理に重要である。子宮内感染診断目的に羊水穿刺施行した妊娠23~32週の切迫早産、前期破水24例を対象に、羊水検査と母体血液検査の結果、穿刺後妊娠経過、CAMや胎児感染の有無を比較検討し、羊水穿刺の意義を評価した。羊水中グルコース濃度(<20mg/dl)、細胞数(>100/m³)、白血球エステラーゼ(>2+)、何れか1つ以上陽性の場合に子宮内感染とした。

感染の判定で児を娩出した7例(CAM5例、うち胎児感染4例)、感染が否定され妊娠継続した4例は羊水穿刺の意義を認め、母体血液検査、羊水検査共に感染徴候なく追加情報の無い4例、穿刺直後に分娩に至った6例は意義を認めず、3例は他の要因で分娩となり判定不能だった。